

グセウル湖への出迎え路

安田公男

はじめに

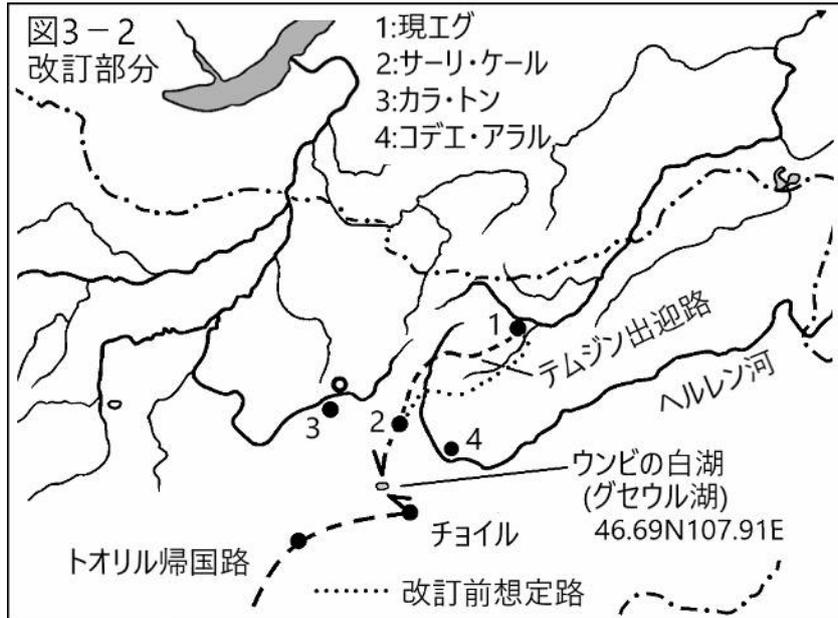
「元朝秘史」には、ケレイト部族のカンであったトオリルについて次のような事が述べられている。——彼は弟のエルケ・カラに国を追われて、遠くカラキタイまで援助を求めに行った。だが願い叶わずに戻ってきてグセウル湖に帰着いた。その時には食糧も尽きかけて惨めな状態になっていた。そこで出会った者がテムジンの隆盛を語ったので連絡を取って助けて貰った。——

筆者は上記のグセウル湖を現在の Umbiin tsagan lake (ウンビの白湖) と判断し、著作の図3-2に、トオリルとテムジンの移動路も含めて示した。その後、テムジンの妻ボルテがメルキトに奪われた事件を再検討する中で、当時のテムジンの居住地であったブルギ河岸と、一族本来の牧地である現オノンエグ地域を直接結ぶ道を秘史の記述に従って確認した。トオリル保護時にもこの道を用いてテムジンが移動したと考えるので、著作の図の一部分を訂正する。その上で、前後の事情について若干の考察を行う。

1. 考察

1.1 テムジンがトオリルを迎えに行った道筋

グセウル湖までたどり着いたトオリル一行をテムジンが迎えに行った経路として、著作の図3-2ではホルホ河とヘルレン河を経てサーリ・ケールに向かう道を想定して描いた。だが、「テムジンはヘルレン河の源から迎えに行った」という言葉があるので、もっとヘルレン河の北、即ちブルギ河岸を通ったと理解すべきであろう。であれば、「ボルテ救出作戦の真偽」で考えた道、即ち、アイル・カラガナ（現エグ）を發し、トンゲリク河（現テヌー河）—ブルギ河岸（現ムングンモリット付近）—サーリ・ケール（現ブールルジュート湖付近）を経由したと考える方が妥当である。通行路の多くが自己の勢力圏と思われる。ホルホ河に沿って南下し、コデエ・アラルを経る道筋の方が距離的には短い、コデエ・アラル付近は数年後に対立して滅ぼすことになるサチャ・ベキ兄弟の住む土地であった。この時点で既にテムジンにはかなり対抗心を持っていたと想像できるので、テムジンは通りたくなかったであろう。又、この辺りの現在の通行痕を見ても、ウンビの白湖とコデエ・アラルの間の土地には東西の通行痕がほとんど見られない。一方、サーリ・ケールと結ばれる南北の道ははっきりと確認できるので、この道を用いたと考えられる。この経路でエグからウンビの白湖までは約350kmの距離である。トオリル一行の発見者が直ぐに騎馬で連絡しに行くとすると、70km/dとして片道5日掛かったはずである。連絡が来た翌日、ある程度の食料を持たせた先遣隊を出し、来た時と同じ速度で帰ったとすると往復10日要する。荷物があるので50km/dの速度と見なすと7日掛かるので、往復12日となる。先遣隊が食料を持ってグセウル湖に到着まで、トオリル一行発見の日から10から12日間要することになる。後にテムジンがトオリルと対立した時にこの事に触れ、「諸部から家畜を徴収して差し上げ、半月も飢えたままにしなかった」と言っている。半月以内の言葉と推定日数が合致する。テムジン本人は諸部から食料や衣服等を集めて、数日後に向かったのだろう。以上の考えを入れて、著作の図3-2の一部を次図のように改訂したい。



1.2 トオリルはなぜ先に自部族に連絡しなかったのか

図に見るように、グセウル湖はケレイト部族の本拠地であるカラ・トンまで200km程であり、エグより近い。テムジンの情報を得るほどだったら、ケレイト部族の当時の状況も知り得たであろう。当時はテムジンとサチャ・ベキに後押しされたジャア・ガンボが、ナイマンの後ろ盾で力を握ったエルケ・カラを追い出してカンとなっていたはずだ。トオリルは権力保持のために腹違いの兄弟を随分殺しているが、ジャア・ガンボは実弟であり、かつ兄弟仲は悪くなかったようである。連絡をとるとしたら、こっちを先にするのはなかろうか。しかし、2年間ほど国に居なかったという引け目があり、ジャア・ガンボに受け入れてもらえるかどうか非常に不安だったのだろう。一方、テムジンとは直接の利害関係が無い上に、少年期の面倒を見てやり、誘拐された妻の奪還にも尽力していた。言わば人生上の貸しを作っていたので、頼みやすかったのだろう。この後テムジンはジャア・ガンボに連絡を取ってトオリルの帰還を知らせたのだろう。そしてジャア・ガンボは快く受け入れたと思われる。

了

参考文献

[1]: 安田公男『チンギス・カンの駆けた道』文芸社 2022年